未来への警鐘としてのＳＦ

―Ray Bradbury の初期の２短編について―

河　野　庸　二

序論

ＳＦが純文学の領域で市民権を獲得するに至ったのはレイ・ブラッドベリ（1920-　）あたりからとされているが，具体的には多作な彼のどの作品がそれに該当するのか，また，ＳＦといえばとかく space opera を連想しがちであるが，彼の作品を芸術品たらしめているのは何なのか，要するに彼のＳＦの特徴は何であるかを探ってみたいと思う。ブラッドベリの短編集 *The Golden Apple of the Sun*（1953）には 1945 年から 1953 年にかけて発表された短編22編が収められている。1920 年生まれの作者にとっては文字通り初期を代表する短編集といえよう。本文は169ページから成り，収められた作品はいずれも短いものばかりである。集のタイトルは巻末に載せられた表題作によるものであり，それはアイルランドの詩人イエーツ（W. B. Yeats）の "The Song of the Wandering Aengus" の一節から採られたものである。作者が単なるＳＦ作家の範ちゅうに収まりきらない多彩な作家であることは全編を通読すれば一目瞭然であるが，そのことはさておき，全22編のうち第２編の "The Pedestrian"（「歩く男」）と，第11編の "Embroidery"（「刺しゅう」）の２編はいずれも 1951 年に発表された作品で，いずれも小品ながら，未来への警鐘をという明白な意図のもとに書かれた，しかも芸術性の高いＳＦとして特に注目される。1950 年代初頭といえば機械文明の全盛期であり，同時に，度かさなる原子爆弾実験によって，核兵器の恐怖が人類にとっての新たな不安として台頭しかけた時代でもあった。思うに作者は１作につきテーマを１つにしぼる上で２編に仕上げる必要があったのであろう。

"The Pedestrian"（「歩く男」）

時は 2053 年，つまりこの作品（1951 年発表）は約100年後の世界を想定

して書かれている。車の洪水でごった返す人口三百万の都市の，昼間とはうって変わりまったく人けのない夜の歩道，家々はすべて灯火を消し，人は皆テレビの画面に見入っている，（ここで家庭の団らんのシンボルである灯火の欠如に注目したい）。そんな夜の街をただひとり歩く男，レナード・ミード。夜の散策は彼にとって何よりの楽しみなのである。かかとの硬い靴を履けば靴の音を聞きつけて犬どもが吠えたて，それがもとで街の静寂を乱すことになりかねないと考えてスニーカーに履きかえるというやさしい心の持ち主である。

On this particular evening he began his journey in a westerly direction, toward the hidden sea.

一見何気なく書かれていてそのじつ極めて意味深長な一節である。the hidden sea とはどういう意味なのか。また，何ゆえに彼はその方に向かったのか。都市化の中でいつしか視界から消えてしまった海の意味ともとれる。人間性の回復をひそかに願う彼は，人類の遠い故郷であり，あらゆる生物の発祥の地である海を無意識のうちに指向するというのであろうか。

ひっそりとしずまりかえった町中を歩いていると，まるで墓地の中を通っているような錯覚にとらわれる。月光に照らされてしらじらと続く道，それは川底をさらけ出した砂漠の枯れ川を連想させ，そしてそこに落とす彼自身の影は，獲物を求めて空を舞うタカの影を思わせる。荒涼とした不毛のイメージ。凍てつく寒気の中で口笛を鳴らし，枯れ葉を踏みしめる音をしみじみと味わい，落ち葉を拾いあげてはまばらな街灯の明かりで葉脈を調べ，かびた匂いをかいでみる彼。彼だけはまだ人間らしさを失なっていないのであるが，人々との対話を求めて家々に声をかけ，好きでもないテレビの話題をもちかけてみるものの，誰一人答えてくれる者はいない。家に帰ろうとした矢先に，たった一台しか残っていないはずのパトカー（人間が人間らしさを失ってしまった社会では犯罪は起こらないのである。）に呼びとめられ，強いライトを照らされたまま，金属性の声で尋問される。職業を問われて「作家」と答えたのに「それなら無職だ」ときめつけられながら，あながち否定しなかったのは，このところ何年も書いていないからである。もはや本も雑誌も売れない時代だった。つづいて「何をしているのか」と尋ねられる。

"No profession," said the phonograph voice, hissing.

"What are you doing out ?"
"Walking." said Leonard Mead.
"Walking!"
"Just walking." he said simply, but his face felt cold."
"Walking, just walking, walking?"
"Yes, sir."
"Walking where ? For what ?"
"Walking for air. Walking to *see*."
"Your address!"
"Eleven South Saint James Street."
"And there is air *in* your house, you have an air *conditioner*, Mr. Mead ?"
"Yes."
"And you have a viewing screen in your house to see with ?"
"No."
"No ?" There was a cracking quiet that in itself was an accusation.

ただ「外を歩いていました」だけでは答えにならないのである。合理主義優先で，明確な理由なしには何一つすることのできない時代。機械文明の高度な発達により人間性の喪失がここまで進行してしまったのである。尋問の末コンピュータのはじき出した判定は「退行性により精神治療センター送り」であった。独房式になった後部座席に否応なしに乗せられるとき，チラと運転席に目をやるとパトカーは案の定無人車だった。護送される途中，街全体が暗い中にただ一軒だけ電灯のあかあかとともった家があった。「あれがわたしの家ですよ。」というミード氏の言葉に対して何ら答えは返ってこなかったのである。非人間的な社会においては人間的な人が異常者とされるのだ。

ブラッドベリが百年後を想定してこの小品を書いて以来既に30数年を経過した今日，社会の現実を眺めてみると，作者の「予言」が驚くほど的中していることに気づく。もっとも，ブラッドベリが想定した百年後という時代がまだ到来したわけではないから，作者の「予言」したとおりの方向に進行しつつあるというべきかもしれない。もちろんブラッドベリは未来のアメリカの都市を想定して書いたのであろうが，皮肉なことに今や日本の場合にも当てはまる事実になった。車社会が到来して道路から歩行者が姿を消し，テレビが日常生活に大きな地位を占めるに至って読書人口は減り，生活にゆとりがなくなって，人々の風流心は薄らいでいる。人間疎外が現代社会の大きな

弊害として指摘され，機械を支配すべき人間が逆に機械に支配されようとしている。ブラッドベリは冷徹な眼で社会の現実を見据えて，荒涼とした不毛のイメージの中に，集約された形でそれらを形象化して，機械文明への盲信を戒めたのである。ブラッドベリの "The Pedestrian" は執筆されてから30数年を経過してなおいっこうに古さを感じさせない迫力を持っている。そういう意味でこの小品はまさしく鬼気迫る一編といえよう。ちなみにこの作品は最近のイギリスの中等学校の国語教科書にも採られている。

"Embroidery"（「刺しゅう」）

1951 年に発表された，ＳＦ的ファンタジーともいうべきこの作品の妙味はなんといっても，核戦争とはおよそ縁の無い３人の spinster を通して，しかも核実験に関する具体的な言葉を一語も使うことなく，あくまでもそれをほのめかすだけで，核兵器の恐ろしさを鮮やかに描いて見せた点にある。これと似た手法で書かれた短編としては，同じアメリカの，女流作家 Shirley Jackson の名作 "The Lottery"（「くじ」）（1948）が思い出されるが，年代的に見ても，あるいはブラッドベリのこの作品にもジャクソンからの影響があったとしても不自然ではない。但しブラッドベリの場合は，具体的な言葉こそ使わないが，扉を徐々に開いていくように，謎めいた表現の中で正体を少しずつ開陳させていくのである。具体的に表現されていなくとも，作者が何を言おうとしているかがじゅうぶんに読者に伝わるように配慮されているのである。つぎに，技法面では，シンボリズムに徹した表現形式が特徴的であるといえよう。まず，作者がなぜ刺しゅうをなりわいとする女たちをキャラクターとして使ったのかを考えてみたい。この作品がシンボリズム的手法で書かれていることを考えると，その答えは容易に得られるはずである。第一，刺しゅう針から絶えず発する閃光が核爆発の一瞬を連想させずにはいないのである。夏の夕方近いベランダの揺り椅子でせっせと刺しゅうにはげむ３人の女。針の閃きだけがあたりを圧している。冒頭の情景描写に用いられた２つの比ゆは奇抜，かつ斬新である。

The dark porch air in the late afternoon was full of needle flashes, like a movement of gathered silver insects in the light. The three woman's mouths twitched over their work. Their bodies lay back and then imperceptively forward so that the rocking chairs tilted and murmured. Each woman

looked to her own hands, as if quite suddenly she had found her heart beating there.

1人が時間を尋ねる。5時前10分。「そろそろ豆のさやをむいて夕飯の支度をしなくては」と女その1は言い，「でも——」のひと言で「ああ，そうそう。」と何かを思い出して思いとどまる。「なんなら，さやをむいてきていいわよ」と女その2が勧める。「いやだわ。」女その2は3人のうちで最も手のこんだ刺しゅうに取り組んでいる。黄色い太陽が緑の野を照らし，茶色の道がうねり，ピンク色の家が見え，一人の男が歩いている情景が一針ごとにみごとにできあがっていく。つづいて女たちの，手をめぐるもろもろの回想がはじまる。女たちは会話の中でこんなことを言っている。

"It seems at times like this that it's always your hands you turn to," she said, and the others nodded enough to make the rockers rock again.

"I believe," said the first lady, "that our souls are in our hands. For we do *everything* to the world with our hands. Sometimes I think we don't use our hands half enough ; it's certain we don't use our heads."

(「わたしときどき思うんだけど，わたしたちの行きつくところは結局手なのよね。」彼女は言った。あとの二人は大きくうなずき，それに合わせて揺り椅子はぎしぎし揺れた。

「わたしたちの魂は手にあるのだと思うわ。だってわたしたち何をするにも手を使うでしょ。それでもまだ手の使い方が足りないと思うことがあるわ。とにかく頭を使っていないことは確かよ。」)

解釈のしようによっては，この箇所は痛烈な文明批評ともとれなくはない。つまり，技術優先で精神面がとかくおろそかにされてきた現代社会への批判がこめられているとも考えられるのである。

鍋蓋を開けたのも，ドアを開閉したのも，花を摘んだのも，食事をこしらえたのも，みんな手であった。その手を使うのもこれが最後と考えて女たちは思わず涙を流す。

"No supper to fix tonight or tommrow night or the next night after that," said the third lady.

"No windows to open and shut."

"No coal to shovel in the basement furnace next winter."
"No papers to clip cooking articles out of."
And suddenly they were crying.

また，３人の女のうち女その２にスポットが当てられているが，思えば彼女が制作中の刺しゅう自体が世界の縮図に他ならないのである。せっかくみごとなできばえと思われた図柄の中のほんのわずかな欠陥に彼女は気づく。

"Now look what I've done!" cried the second lady, exasperated. The others stopped and peered over. The second lady held out her embroidery. There was the scene, perfect except that while the embroidered yellow sun shone down upon the embroidered green field, and the embroidered brown road curved toward an embroidered pink house, the man standing on the road had something wrong with the face.

つまり彼女は刺しゅうの中の男の顔に欠陥を見出すのである。「わたし全部やり直すわ。」と彼女はいう。やがて男の顔は刺しゅうの図柄から消えていくのである。この段に至って読者はノアの方舟の話を連想せざるを得ないであろう。確かに核戦争は現代のノアの方舟に他ならない。営営と築き上げられてきた人類の文化と文明が，ごくわずかなつまずきから滅亡の危機に陥っていることをシンボライズしているとも解釈できる一節である。（諸悪の根元は人間なのである。）シンボリズムに徹した技法の冴えがここにはある。
そしてやがて，

"What time is it?" asked someone.
"Five minutes to five."
"Is it supposed to happen at five o'clock?"
"Yes."
"And they're not sure what it'll do to anything, really, when it happens?"
"No, not sure."
"Why didn't we stop them before it got this far and this big?"
"It's twice as big as ever before. No, ten times, maybe a thousand."
"This isn't like the first one or the dozen later ones. This is different. Nobody knows what it might do when it comes."

(「今何時。」とだれかがたずねた。
「5時前5分よ。」
「5時ちょうどということになっているんでしょ。」
「そうよ。」
「そのときどういうことが起こるかということはわかっていないんでしょ。」
「そうなのよ。」
「こんなになるまで,こんなに大きくなるまで,わたしたちどうしてほおっておいたのかしら。」
「これまでのより2倍も大きいのよ。いいえ。十倍よ。あるいは千倍かもしれないわ。」
「今度のは最初のやこれまでのとは全然ちがうのよ。結果がどうなるかまったくわからないのよ。」)

やがて5時1分前になる。

The needles flashed silver fire. They swam like a tiny school of metal fish in the darkening summer air.

Far away a mosquito sound. Then something like a tremor of drums. The three women cocked their heads, listening.

(針は銀の火花を飛ばした。針は暮れゆく夏の空気の中を，金属製の小さな魚の群れのように泳ぎつづけた。

遠くで蚊の羽音。つづいて太鼓のとどろくような音。3人の女はいっせいに耳を傾けた。)

まさに嵐の前のしずけさである。

"We won't hear anything, will we ?"

"They say not."

"Perhaps we're foolish. Perhaps we'll go right on, after five o'clock, shelling peas, opening doors, stirring soups, washing dishes, making lunches, peeling oranges..."

"My, how we'll laugh to think we were frightened by an old experiment!" They smiled a moment at each other.

(「音はしないんでしょう。」

「しないそうよ。」

「ことによると，わたしたち馬鹿なのかもね。ことによると，わたしたち，5時が過ぎても今まで同様にさやをむいたり，ドアを開けたり，スープをかきまわしたり，お皿を洗ったり，昼ごはんをこさえたり，オレンジの皮をむいたり…」

「そうなるとわたしたちなんでもない実験を怖がったりしたことを昔話にしておかしがるでしょうね。」3人の女は一瞬ほほえみを交わした。)

この段に至って初めて具体的な「実験」という言葉が出てくる。いや，具体的な言葉が使われるのは，後にも先にもそれきりなのである。

5時になる。女たちはただ無我夢中で針を運ぶ。はりつめた緊張感。このあたりはまさしく全編のクライマックスである。30秒がたつ。一瞬何事もなかったかと気をもたせる。女その2はため息をもらし，ほっとくつろぐ。「わたし豆のさやをむいてくるわ。それから…」彼女が言い終わらないうちに破局が訪れる。視野の片隅に彼女は世界がパッと明るくなって引火するのを見たのだった。彼女は頭を上げなかった。それが何であるかを知っていたからである。女たちは最後の瞬間まで針の動きを止めなかった。女たちはあたりを見回して国が，町が，自分たちの家が，それどころかこのベランダがどうなっていくかを見ることもしなかった。

女その2は手元を凝視しつづける。まず，刺しゅうの中の花が消え，つづいて道路が消え，草の葉が姿を消す。やがて火はなおも閃く針先に燃え移り，あたかも刺しゅうの図柄を一つずつかき消していくかのように，彼女の指先を，腕を，身体の組織を一つ，一つ焼きつくしていくのである。

The second woman watched an embroidered flower go. She tried to embroider it back in, but it went, and then the road vanished, and the blades of glass. She watched a fire, in slow motion almost, catch upon the embroidered house and unshingle it, and pull each threaded leaf from the small green tree in the hoop, and she saw the sun itself pulled apart in the design. Then the fire caught upon the moving point of the needle while still it flashed ; she watched the fire come along her fingers and arms and body, untwisting the yarn of her being so painstakingly that she could see it in all its devilish beauty, yanking out the pattern from the material at hand. What

it was doing to the other women or the furniture or the elm tree in the yard, she never knew. For now, yes, now! it was plucking at the embroidery of her flesh, the pink thread of her cheeks, and at last it found her heart, a soft red rose sewn with fire, and it burned the fresh, embroidered petals away, one by delicate one...

一気に読ませる結末の描写はみごとである。ここにはファンタジーの作家と言われるブラッドベリの真骨頂が遺憾なく発揮されていると思う。タイトルのもつ多重の象徴性も見のがしてはならない。

結　語

Gene Wright 著のＳＦ百科ともいうべき本 The Science Fiction Image の Bradbury の項には次のように記されている。

Bradbury's later works are not up to the standards set in what are considered his vintage years : 1946-1956. His reputation has continued to grow through the world, however, and he is still a prorific writer, with more than 500 works to his credit...

まさにそのとおりなのであろう。功なり名とげた大家ブラッドベリよりも，いわば駈け出しの頃のいちずな彼のほうがすぐれた作品を書くことができたとしても，きわめて当然のような気がする。

参考著書

Ray Bradbury : *The Golden Apple Of The Sun.* (Bantam Books, Inc., 1970)
Gene Wright : *The Science Fiction Image.* (Fact On File, Inc., 1983)